

POLISH letter

No.5, 2021



現役薬学部女子学生と語る II ～女性薬学研究者育成チームPOLISH座談会～

前回に引き続き就職活動を終えた薬学部6年生・薬学研究科博士課程前期2年生の女子学生4名とPOLISHメンバーで座談会の様子をお伝えします。今回は志望動機や10年後の自分についてお話を伺いました。

一あなたが内定を得たその業種を志望した理由などを教えてください

Eさん：具体的に開発職に決めたのは、インターンを始めた後です。薬学科なので、薬剤師職の選択肢もあり、実習を通して薬剤師も楽しかったし向いているかと思ったけど、一度企業に就職してみたいと思いました。セカンドライフで薬剤師として働く選択もあるかなど。私は、研究でもなく、MRでもない、自分の適性を考えて開発職にしました。ずっと楽しくやっていけそうって、自分の適性を一番に考えました。



Fさん：就活で多業種を見て、メーカーの研究職や開発にも魅かれたが、実務実習に行き、一人ひとりの患者さんに向き合ってケアをすることに魅力を感じました。病院と薬局で迷ったが、実習中、病院だと忙しくて患者と向き合う時間があまりなかった。薬局だと患者さんと関わる時間が多いのかなど、(5年の)10月頃に薬局薬剤師を選びました。

Gさん：研究職に内定しました。高校生のときから、漠然と将来は研究の仕事につきたいと思っていました。実際に就職活動を始めて、改めて幅広い業界や職種があることを知りましたが、その上で研究職への気持ちがさらに強まりました。研究職に決めた理由の一つは、自分が研究や開発に携わったものが世の中に出て使われているのを目にした時に、きっと感動するだろうと思ったからです。

Hさん：研究職を意識したのは、研究室配属後の3年生～4年生にかけてです。大学入ってから、製薬会社はずっと意識していたし、医療系にずっと興味がありました。研究室に入って、事務系の仕事もあるけど研究がいいと改めて思いました。

堰本：研究職の中に、アカデミア(大学や研究機関)という選択肢はなかった？

Hさん：なかったですね。現時点で博士課程後期(ドクター)に行く考えがないし、アカデミア行

くならドクター必須のイメージだから。自分が携わったものを社会に出すと考えると、達成できそうなのが企業のような気がして。大学に残っても、基礎研究から始まって当たったら製薬会社と共同研究になって、道のりが長く感じます。生きている間に達成感を得たい(笑)。「人の役に立ちたい」が軸で、製薬会社行ってから基礎研究やりたいって大学戻るとても多いって聞きます。



佐藤恵：女子学生が博士後期になかなか進学しない、教員にならないのはなんでだろうって問題になってるんだけど、どうしてかな？

Hさん：研究室に女子の博士学生がいないんですよ。近い研究室には女子がいたみたいだけど、会ったことがない。先駆者がいないから、(アカデミアに進むという)道がないと感じます。製薬企業は最近では女性でも当然、男性と平等に扱ってもらえるし、周りが製薬企業に行くから道が見えるってのもある。

Gさん：今やっている研究を博士までやってみるのもアリかなと思ってた時期もあって、家族に博士進学するかもと言ったらびっくりされたことがあります。私は両親から早く自立したいという思いと、博士の間にやっぱり研究が辛くなったらどうしようという不安から、修士で就職して研究だけではないキャリアも選択できる道に進むことにしました。内定先の企業は、入社してから学位をとる人の割合が半分くらいと聞いているので、就職してからも様々なキャリアの可能性を考えたいと思っています。

一10年後(30代半ば)の自分はどうなっていると想像していますか？

Eさん：今はまだ配属先が分からないし、配属先によって野望が変わるとは思うんですが、どこの職種でも極めることが好きだから、変わらずやれてたらいいしかあんまり頭はないです。私のキャパシティを超えない範囲でやりたい。可能ならば働き続けたい。博士号については、自分の適性を考えて働いてから考えます。



Eさん
薬学科6年
公的機関
技術系専門職



Fさん
薬学科6年
調剤薬局
薬剤師



Gさん
分子薬科学専攻
化学メーカー
研究職



Hさん
生命薬科学専攻
製薬メーカー
研究職

佐藤恵
熊田
堰本
佐藤由

迷ったら、光の射す方へ

第3回 臨床薬学分野 堰本 晃代

実験動物の技術者になって二十余年が経つ。農学部を卒業し、牧場で働くことを夢見ていた私が、幾度のピンチとチャンスの紆余曲折の末に就いた職。今思えば、天職だ。あの時、大学院への進学とこの道を示してくれた諸先輩方に今も感謝している。

人生はどこで何があるかわからない。超就職氷河期に、春からどうやって生きていけばいいのか途方に暮れていた22才の私には、まさか40代で大学教員になる未来があるなんて、天と地がひっくり返っても想像できなかった。

ただ言えることは、苦しくてもその時々目の前にあることに真剣に取り組んできた。それだけは自負している。故に、チャンスをくれる人に会って、手を差し伸べてもらえたと思う。

ピンチがチャンスなんて簡単には言えないけど、でも、迷ったら光の射す方へ進む人生も、そう悪くない。

女性教員リレーコラム



Fさん：入社したら薬剤師として働くけど、薬剤師としてそれ以外の仕事をしている人もいるので、専門性を極めるより、色々なキャリアもチャレンジしたいです。今考えてるのは、薬剤師教育をしたい。自分が関われる患者さんには限りがあるので、種をまいて、自分が教育した薬剤師がたくさん患者さんに還元できたらいいなと思います。

Hさん：10年あったら、ライフイベントがたくさんあるけど「働き続けていたい」というのが一本筋としてあります。でも、ただ毎日通勤するだけではなく、挑戦をしたいです。

堰本：ライフイベントって結婚とか出産とかだよな。今の時点では、そういうことがあっても働き続けていきたいと考えている？

一同：はい。

Gさん：自分の研究で携わったものが、世の中に出ていたらいいな。機会があれば、学位を取ったり、留学したりしたい！

佐藤恵：結婚・出産すると留学とかのタイミングが難しい。行くなら私は単身の時がいいと思うな。

Gさん：そうすると結構時間ないですね。入社してぐいぐい行かないと駄目ですね。

堰本：10年って、思ってるより短いよ～。

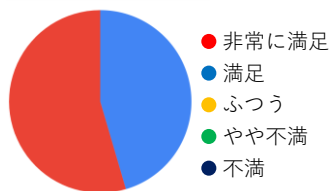
POLISH主催 第1回

薬学部OGによるオンライン講演会を開催しました

10月28日、薬学科（臨床薬学分野所属）卒業生の岩森紗希さん（大正製薬株式会社 臨床開発部）を講師にお招きし、オンラインにてOG講演会を開催しました。平日の昼食時間帯にも関わらず、薬学部・薬学研究科の女子学生を中心に30名を超える参加があり、学生の関心の高さがうかがえました。講師の岩森さんからは、現職である製薬企業・開発職の職務内容や実際の仕事の取り組み方、研究室での生活を含む学生時代や就職活動に関してのお話を伺うことができ、薬学所属の女子学生にとって自分の将来を想像する有意義な時間を共有することができたのではないかと思います。

開催後の参加者アンケートでは、参加者の非常に高い満足度が示されました。回答の一部をご紹介します。

Q. セミナーの満足度



Q. このセミナーのどのような点が役に立ちましたか？

- ・開発の仕事に興味があったが、大学での勉強や研究と仕事のつながりを学べた
- ・実際に企業で働いている方の研究室・企業選びの経緯を知ることができて参考になった
- ・薬学科卒業後のキャリア例を知ることができた
- ・開発職の業務内容を具体的に知ることができた

Q. 今後はどのようなセミナーの開催を希望しますか？

- ・今回同様のセミナーで多業種・他部署のOGの話聞いてみたい
- ・POLISHの教員の話聞いてみたい
- ・薬学科卒業後に博士課程に進学した方の話を聞いてみたい
- ・女性視点ならではの話を聞いてみたい

POLISHでは今後も薬学所属学生が関心のあるテーマについて、多彩なセミナーの開催を予定しております。皆様のご参加をお待ちいたしております。

POLISHの活動について、皆さんからのご意見・ご要望・ご感想などをぜひお寄せください

発行・編集：東北大学大学院薬学研究科
女性薬学研究者育成チーム POLISH

polish@mail.pharm.tohoku.ac.jp（事務局 佐藤由紀）